## この次の考へ物

(一)黑い羊は、白い羊よりも、草食ふことが少いといふ譯は？

(二)足なくて走るものは？

## 母の言葉

高木四郎

母の兒童に對する言葉の、今日の一般をみると、兒童に對して、母の言葉が多すぎる樣である。多すぎると、從つて、母の言葉に勢力がなくなる。勢力がなくなると、母の言葉が、兒童の言葉のために斃される。また、言葉の數が多すぎると、自然、取り消しをしなければならない場合が多く出來る。そこで、母の言葉の、取り消しだの、敗北だのが、度重なると、その兒童は、世にいふ、言ふ事を聞かない兒となるのである。

兒童が、親の言ふ事を聞かないと言ふ事は、最も恐るべき事で、兒童のために、此の上もない危險である。兒童は、熱いものを知らず、怖いものを知らず、やゝ成長しても、病の恐るべき事を知らねば、どーしたら病に罹るのかをも知らない、であるから勿論命といふ事を知つて居るはづはない。また、池の緣に臨んで、落ちると恐しいといふ事は、よし知つても、かうすれば足が辷るとい

ふ事を知らず。又物は、物がきれるといふ事は、縱令知つても、かうすれば自分の指が斬れるといふ事を知らない。

かく、何も知らないづくしの兒童を、明智の域に導くものは、これ偏へに言葉である。從つてまた、言葉によつては、その反對に導くのであるといふ事も、特に爰にことわつておかねばならないのである。かういふ樣に、母の言葉は、兒童訓育上、甚だ重いので、家庭の敎育といふも、つまり此の言葉が導くのであるといつてもよいのである。然るに、此の重くなければならぬ母の言葉の、今日の實際を見ると、甚だ輕くて、むしろ、兒童の言葉の方が、目方があり、勢力があるのである今その實例を、三つ四つ擧げつゝ、評して見よー。

(一) 兒童は、友達が來たので、忙はしく下駄をつかけて、勝手口を、外へ出でんとすると、

母、外へいつてはいけません。

兒、だつてかーさん、さつき、家に居ては喧しくつていけないつたぢやーないか。家に居ても、外へいつてもいけなけりやー、どこに居ればいーの？

兒童はなか〳〵理屈家であるが、これは兄にしこまれたのである。母は何と答へるかと思ふと、

母、遠くへいつては、いけないと言ふのさ。

(評)母は、甘くさり拔けたが、初めには、外へいつてはいけないと、確かにいつてゐながら、今から云ふのは、自家撞着である事は、明らかである。

兒、遠くへいきやーしない、此處で太郎さんと

遊んで居るんなら、いーだらう。……かーさんいつでもよけいな事をいつてらー、だから兄さんが、うつちやつておけといふんだ。

（評）兒童は、母までが怖がつて居る兄さんを引き出して來て、頻りに母の言葉の、輕卒であつて、更らに條理のたたないのを責める。

太郎　君、遊ばないの……？

兒　うーん、今行くの……！

（評）爰において、母の言葉は、確かに兒童のために打ち破られたのである。目前で忽ちにして敗北を見たのである。かういふ事が度重なると、母の言葉の輕くなるのは當然であらう。しかしこの位の事はまだ〳〵罪の輕い方なのである。



（二）

裏棚の貧家住まひではあるが、人間は由所あるものと見えて、夫婦ながら、處に似ず人品がある。其の裏棚の小路を、今や金魚賣が這入つて來る。その家の兒は、二三人の友達と遊んで門口に。

金魚賣、金魚やー金魚

兒　かーちやん金魚買つて……

母　いけないよ。

金魚賣、金魚やー金魚、

兒、かーちやんよー、金魚買つて、よー、

金魚賣、金魚やー金魚、

金魚賣は遠慮もなくだん〳〵這入つて來る、

母、いけないったら、こつちへおいで。いー兒だからぬー、一寸おいで、

（評）母は氣が氣でないから、こつちへ兒童を呼

ばうとしてすかせど、だませど、兒童は勿論言ふ事をきかない。其のうちに、金魚賣はいよ〳〵門前へ來て、

金魚賣　金魚やー金魚。

兒　よーかーちゃん、よーかーちゃん、よーよー〳〵

といつて終に泣き出したから、今いー兒だからといつた母は。忽ちかはって、

母　うるさいねー金魚賣さん一つやってください、家の兒は言ふ事を聞かないでこまる。

(評)母が兒童の云ふ事を聞いてこまるのである此の時兒童はすぐに莞爾として、今まで反對した母のそばへすぐもっていって

兒　かーちゃん金魚！

(評)母は何と返事するであらうか、此の天眞爛漫にして愛すべき自然の神の言葉に、と思つて聞いて居るともなしに聞けば、やはり返事が出來なかったと見えて、

母　金魚を買ってあげたから、おとなしくしなければいけないよ。そっちへもっていっておあそび……！

(評)此の問答は、誠に餘儀ない場合とはいへ、兒童に泣かれるのと、否、寧ろ金魚賣の目前に來て居たため、母は、一種忍びざる情に逼られて、遂に母の言葉は、自然隱滅といふ姿に、母自らしたのである。是れもまだよい方法の確かにあるのであって母は初めに愛にひかされたからかく隱滅せしめなくてはならない樣になったのである。買ってやったのが惡いといふのではない。唯母の言葉に、初め今少

しの慎みがあったならば此の隱滅的敗北は見ずに、兒童を泣かせずにすんだであらうものをと遺憾なのである。

濱の眞砂のそれよりはと思ふほど世に多い例であるから、特に場合を擧げないが……

（三）

兒　かーさんいってもいーの……？

母　いけません。

兒　だってかーさんさっきいってもいーったではないの……？

（評）前に母と約束があったらしい。然るに、

母　それでも今御用があるからいけないよ。

（評）此の母の答へは、何と兒童を輕蔑した言葉ではないか。先きには確かにいっていーといったのであった事は、今此の返事をきいても明らかである。其の約束の時間内に何か用が出來



たならば、たとひ母でも賴む口調で出なければならないのである、然るに今かういふ事をいふのは、母が兒童を一人前と見ないからなので、かういふ言葉の内には到底順良な氣質を養ふ分子は、含んで居ないのである。然るに兒童は、

兒　さう、何の御用……？

母　一寸お隣へいってもらふんだよ、

兒　それぢやー其の御用がすんだらいってもいーの……？

（評）兒童はあくまで正當に温順にでる。此の母にして此の兒ありとは、たゞ〳〵意外であると思ふに、

母　まーうるさいねー、いけないったらおよしなさいなねー、

兒　でもかーさんさつきいーったちやーない
の……？

（評）此の兒童の詞こそ眞に愛すべき尊き價値あるので、よく其の心に約束を忘れないのである。自分の欲する處とはいへ、かくまで約束をかたく信じて主張する、いかに邪見な母でも、これには同情を表さねばならぬと思ふに、

母、　どーでもかしよ、

（評）兒童は、此の母の一言を何ときいたであらうか、此の一言は果して兒童の心裡に、如何に印象したであらうか。又此の印象の結果は、如何なる場合に現れて來るであらうか。余はこれらについては、此の實例を終へてから、更らに論じて世の母たるべき人に對して、注意をそはんとする者である。

（四）　兒童は風邪の氣味で、五日程前から咳をする。母は百日咳にでもなりはせぬかと心配して、二三日前から醫者へ連れて行かうとして居るが兒童はなか〳〵きかないだがいよ〳〵明日は行くといふ事に交渉ができ約束がなったので、さて其の夜は寢た。やがて明日といふ日が、今日來たのである。

母　さーー今朝のうち、お醫者樣へ行きましよーー。

兒　いや……行かない、

母　今日は行かなければいけませんよ、さっきおとーーさまも、今日はいけと言っておいでになったではないか。それに前は行かないと今に咳がでて苦しくってたまら

なくなりますよ。

兒　いや……それでも僕はいや……！

母　それでも昨日は、あした行くとゝ約束したではないか？

兒　でもいやだったら僕はいやだ、苦しくなったつていーや。

（評）是れが兒童の天眞爛漫、生々的活氣のある處で、昨の事も明日の事も一向に頓着しない、いや、そんな事を、假想するまが腦中にない、謂はゆる現世主義なので、樂天的な處である。此處で母は是非連れて行かうとすれば此の關白的雄大の言に、逆らはねばならないのであるが、それにしても、兒童が昨夜の約束を忘れたはづはないのであるに、さらにそれに頓着しないのは何故であらうか。さて母はどーするかと思ふと、



母　よーござんす、その通り言ふ事をきかなければ今日は一日外へは出しませんぞ。そーして兄さんが歸つていらしたらお藏へ入れて頂く、……

（評）母は恐喝手段を取った。しかしもとゝ恐喝したのであるから、心には實際そーしよーとは思つて居ないので、つまり心にない事をいったのである。であるから、すぐに入れる事をしないので、しばらくして又、

母　それでもいーのですか、

兒童は無言で居ると、母は決心した、だが一時の決心で、やはり心からでない、心のうちでは、しょーがない兒だ　とだけ思って居るのである。それ故兒童は、あとで友達が來たと

もなしに、ぬけて外へ出て行く。母は知らず顔で、何か奥で用をしながら弱って居る。するとちき歸って來たが、みんなの顔つきのおもしろくないので、室の隅に尻を据ゑた。すると今度は、叔母や姉が兒童を嫌し初めた。兒童の名は四郎であった。

叔母　四郎さんいー兒だからお醫者樣へいっておいで、叔母さんがいー物をこしらへておいてあげるから。

姉は叔母に應援して、

姉　そーねー、若しお醫者樣へ行って來ればおもしろい物を拵へておくわねー叔母さん。

(評)叔母は、兒童を醫者にやりたいが一心なれど、しかし猶腹に考へがあって言って居るのであるが、姉はたゞ叔母に雷同したので、心には此の時決して何を拵へるといふ考へもなく、又何を拵へるのだかも、聞いて居る兒童と同じく知らないのである、心にない事を言って居るのである。叔母は姉といふ味方を得て、

叔母　そーよ、ほんとに、……

姉　ほんとにねー、いー物を拵へておくわ。

(評)兒童は知るや知らずや、わからないが、此のほんとに〳〵が、あやしいのである。然るに又、

叔母　そーねー、あれねー、

姉　えー、あれをねー、ほんとよ。

兒童は片隅に小さくなって、何か惡戯をして居たが、此のあてこすった樣な應答を、なーに

例の叔母さんと姉さんが何を言ふかわかりゃーしないと言ふ風で、初めは聞いて居たが、あまりにほんとーらしいので、

兒　あれって何？

叔母、姉　あら四郎さんどこに居たの……あれってまーいーのよ。行って歸って來なければ、わからないのよ。

兒　なんだ、いつでもどっかへ往かうと言ふ時、いやだって言ふと、そんな事ばかりいってらー。そんなものはいらないや。

此の詞で兒童がさきに約束を何とも思はなかったのがやゝわかった。さて、叔母や姉の苦心も此處にれいてだめになったが、なほどーするかと思って居ると、姉は又もとの事を繰り返して、



姉　だって四郎さんお醫者樣へ行かないと今に苦しくなって大變よ。

（評）姉は此處に初めて必の底から、眞實腹にある事をいった。

兒　大變だっていーや。うるさいなー。

（評）兒童の詞、ます〳〵出でてます〳〵妙。姉たちは或は心にない事を言ひ、又ある事をいっては何を言ふのやら更らにわからないから、神聖なる罪なき兒童は、一言の下にこれら不淨なる詞を退けて、再び愛らしき手、さゝやけき口、うつむきながら指に唾をつけつゝ少年世界を讀むともなしに開いて居る。其の時母は、一間隔てゝ此の問答を聞いて居たが、叔母や姉の言ふ方便にかぶれたか、一策を案じ出だし。

母　……では、お醫者樣へ行ったら、淺草の觀音樣へ、かーさんが連れて行ってあげよー。

（評）兒童は、自分の最も愉快な、無上の樂土だと常に思って居る淺草の觀音樣といふ一言を聞いたので、心、忽ち動いて、

兒　ほんとに……？　かーさん、

母　えー、お醫者樣の歸りにズット行きませう。

（評）兒童の醫者へ行くのは咳のためであって、風にあててはいけないのである。車にのせて遠くに行くといふのは、不適當な事なのである。此の位の事を知らぬ母ではないが、もと〳〵母は心にない事をいつて一時兒童を瞞着しよーとかゝったのであるから咳のためも何も忘れて、今は勢ひ醫者へ連れて行きさへすればよいといふよーな工合になって來たのである。兒童は又此の嬉しい詞を信じて、醫者への苦痛も忘れて、

兒　ほんとーに……？

母　ほんとーですとも、ねー叔母さん……

叔母　えー、ほんとーですとも、

と言ひながら、叔母と母とは、顏を見合はせて、何か以心傳心。

姉はまた、いらざる口をそへて

姉　ほんとーですわねー、かーさんがなんでうそおっしやりゃしないわ。

といふと、又、

叔母　そーです。て、かーさんが、なんでうそをおっしやるものですか。

など　一つ事を唯繰り返してしやべる。そこで。

兒　それぢゃーかーさん行かう、はやく行かう……

母　おや行くの……、いー兒だねー、それでは叔母さん着物きせてやって下さい。姉さん車夫に仕度させておくれ。

兒　嬉しいなー、淺草へいったらかーさんに、此間見ておいたあれを買って頂くのだ。

（評）此の時の兒童の心中いかばかりであらう。飛び立つばかりの勢ひになつて、先きに辭した醫者にも平氣で行かうといふのである、淺草と聞いたために。斯くて着物は着た、姉は車の用意はできたといって來る、兒童は今や母の居る化粧室にはいって、飛んだりはねたりして母の着更への遲きをせめる。……

さて、醫者へは行つたが、歸りに醫者の門を出ると、車夫奴は反對に家の方へ牽いて行く。兒童は驚きあはてゝ、

兒　權兵衛！淺草の觀音樣へ行くのだよ、そつちへ行てはいけない。

權　觀音樣へはもー暑くなりましたから、歸つてから行きませう。

（評）母からか、叔母からか、將　姉からか、已に秘密の魂膽を通じてある。

母　淺草へは歸て兄さんに連れてつて頂かう。かーさんといっても何も買へないから……

（評）偽わり事である證據には、返答する毎に、その返答がちがって居る。

兒　僕はいやだ、觀音樣へ行くつたから來たのぢゃーないか、さっきかーさん歸りにズット行くつたぢゃーないか。

母　權兵衛は車を一寸とめてふりかへると今ねーかーさんが財布を忘れて來たから、取りにがうちへ行ってそれから行かう、……

兒　こまったなー……

權兵衛は車を引き出す、兒童は車の上で母の不注意を責める。母は甘くいったと大喜びで兒童よりの責めを甘受しつゝ忘れさせよーとするが兒童は歸つて來ても忘れないで、切りに責める。母は嫌す、姉はだます、叔母は途方に暮れてる。兒童はつひに泣き出して、母、叔母、姉は勿論、車夫の權兵衛までも、うそをついたからといふので藏へ入れろといふさわぎになったのである。

是れらの例は、世に少なくないと思ふがから云ふ家庭の詞で導かれた兒童の、うゝ僞りを言ふ事を何とも思はなくなるのは當然である、母初め皆々打ち揃ってうゝ僞りを、氣がつかずに言つて居る。氣かつかないと言ふのは、つまり詞に愼しみがないからである。いかに方便とはいへ、まだ清淨潔白なる兒童の心裡には、如何なる汚點を印するであらうか。かう言ふ言葉が度重ったらば、兒童は言ふ事をきかなくなるは勿論、自分もまた勝手次第な出任の言葉を口にする樣になるは明らかであらう。親子兄弟間の朝夕の言葉が、已に斯くのごとくならば、地の友人等に對してはいかゞであらう。これでは世にいはゆる、口は禍の基であ

るが實は、口は幸の基でなくてはならないのである。實例はこれで了はりとして次ぎには、此の口は幸の基といふ事について述べ。それから方法に立ち入つて論じようと思ふのである。

子等よ汝まさまくあれや老の親の
こゝろつくしの杖しろの身を

## 小さき日記

印東おとな

げん坊とお姉樣

げん坊は滿一年と十日お姉樣は三年五ヶ月なり。

十二日。猿廻し來る。げん坊「オトヽヽヽ〳〵」と喜ぶ、猿の餘り杖などつきて走り廻るに氣味わるくてか泣き出す。



十三日。午後八時すぎ母君姉君も共に蚊帳に入りて眠りかけし處へ神田の叔母さんと姉さんと來給ふ。叔母さんがたのおすし召食り給ふを見てよこせとて「ウー〳〵」と叫び出し少し許り頂きしに又箸をよこせとて之もとり、その箸もて側にありし菓子鉢の中をつゝきてはなめ、つゝきてはなめ、果ては湯呑茶碗をとりて飲む眞似さへなすに叔母君たち、ころげて打ち笑ひ給ふ。

十四日、障子につかまり三足ほどあゆむ、手放にてたつことも梢上手になりたり。晝母君と台所に居りしに火鉢の炭はね、膝の上やけどして泣く。夕方千葉より叔父君參られしに抱れて外へ出よとて「オー〳〵」と指せしも、叔父君急ぐ故、今日は勘忍せよとて立給はねば首を振りて